

## ◀S·E·L·D·A·A▶ No.7

昭和62年10月25日 発行

上智大学英語学科同窓会  
東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学英語学科事務室気付

## Sophia English Language Department Alumni Association

今年もまた、年に一度のSELDAAパーティが近づいてきました。卒業してからすっかり母校とご無沙汰していらっしゃる方、時には青春の原点に戻って昔の仲間と旧交を暖めてみませんか。我が英語学科同窓会(SELDAA)では、毎年恒例となったSELDAAパーティを今年も下記の通り企画しました。

今回のパーティは、バリー神父様の還暦のお祝いを兼ねて準備を進めており、またパーティに先立つ講演会では、バリー神父様に上智大学での思い出を語っていただく予定になっています。

お誘い合わせの上ぜひご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

## SELDAAパーティ

11月28日(土)

午後 4時	バリー神父様講演会	上智大学8号館3-309教室
5時30分	SELDAAパーティ	上智会館5階第6会議室

会 費：3,000円(ご家族でご参加の場合は4,000円)

ご都合を同封の葉書にてお知らせください。

昔の仲間とのうれしい再開を期待し、また常日頃連絡し合っているALUMNI、ALUMNAEと家族同志で顔を合わせるのも楽しいことでしょう。年一度のSELDAAパーティはいつも懐かしい思い出に溢れた親しみやすい雰囲気集いです。久し振りの母校を堪能していただければと思います。

・今年のSELDAAパーティでは、昭和40年卒業の同窓会幹事が実行委員会を運営していますので、昭和40年卒業の皆様には特にご出席いただけますよう、ご案内申し上げます。

## エバレット教授退官記念講演に出席者多数

長年英語学科で教鞭をとられ、近年英語学科長およびこの同窓会の名誉会長として尽力をいただいたウィリアム・エバレット神父様が、今年3月31日をもって上智大学を退官され、京都の聖母短期大学国際文化学科の学科長に就任されることとなり、去る2月21日に記念講演会が開催されました。

この講演会は昨年の英語学科同窓会の会報発行の後企画されたため、ソフィアだよりを通じてしかお知らせすることができなかったにもかかわらず、英語学科卒業生をはじめ、神父様ゆかりの方々が多出席され、神父様の熱のこもった講演に耳を傾けておられました。

講演会の後引き続き行われたパーティでは、ひさしぶりに母校を訪れた方々も多く、神父様を囲んで思い出話に花が咲きました。

英語学科同窓会としましても会の設立以来、暖かく見守ってこられたエバレット神父様に深い感謝の意を表するとともに、これからの神父様のご健康を会員一同お祈りする次第であります。なお聖母短大での生活など、近況を綴られたレターが同窓会あてに届いておりますので、原文のままここに掲載いたします。

Seibo Junior College: Kusafuka, Fushimi-ku, Kyoto.

Sept. 30, 1987

Dear Eigoka Graduates,

Six months have passed since I left Sophia; this is the "objective" time. But "Subjectively" how long has it been? That is an interesting question.

Sometimes it seems to have been but a few days. If I were to begin classes at Sophia again from Oct.1, I would be able to go back and fall into the old routine with no feeling of change at all, and this time in Kyoto would soon disappear from my mind completely. On the other hand, at times it seems that Sophia is far off in the distant past. Natsukashii memories and faces of friends remain, but most else is rapidly fading away like the morning mist....So let's just be "objective" - six months have passed.

As you know, perhaps, I was asked to come here to be the head of a new department (Kokusai Bunka Gakka--what is the best English translation of this?) It was supposed to begin in April, 1987 but because of difficulties with the Min. of Education, the opening was delayed one year. Therefore this year I have been working as an English teacher while making preparations for the new department to open in April. 88. My work here is completely different from what it formerly was at Sophia.

I have little contact this year with the students. I teach only compulsory courses of general-education English. The students here do not like foreign languages at all. There is no English in the entrance-exams (that is one big reason for coming here)--so we don't have too much in common. Most of my work is with the teachers and employees. In Sophia administration and teaching are quite separated; but in a smaller school like this they go together, so I participate actively in administration work. Before the summer vacation and now especially during September we go around making PR for the junior college and for the new dept speaking to meetings of high-school teachers in Osaka, Kyoto, etc. Since the new dept has not yet been formally approved, there are restrictions on our activities, so it is hard to hold recommendation examinations or to imagine how many students may take exams to enter the new department.

I am the only priest and there are no other foreign teachers, so I am experiencing directly real Japanese society much more than at Sophia. The same holds true for the whole environment, Fujinomori (the Keihan station) area is far different from Yotsuya. I live in a white house ("The White House" some people call it) inside the campus all by myself. I cook my own breakfast and lunch, but the sisters bring over my evening meal each day. Though I am far from being a high-class chef like Graziano or Kusafuka Sensei, still I'm keeping well-fed, healthy and happy.

The new department will not be very large at first; we will probably take about 70-75 students the first year. We plan to have some kind of a study-tour to the US next summer, in which I will also participate. My last visit to the US was in 1973, so I suppose it is good for me to go back and "brush up my English" again.

I still don't completely have the feel of the city of Kyoto; Osaka is easier for me to understand. It is much the same as Tokyo, both huge commercial, industrial cities, cities moving into the future, Kyoto, on the other hand, has little industry or commerce but stands as a guardian of the traditions of the past. Temples occupy large sectors of the city and seem to exert quite an influence both on the lives of individuals and on the city as a whole. I still haven't seen too many of the famous temples or gardens, but am gradually making the rounds. The latest place I visited was Enryakuji on Hieizan. It was quite impressive and seems to still be quite alive. But since it is spread out all over Mt. Hiei it was impossible to see it all, so I must go back again some day.

When I was in the English Lang. Dept. at Sophia, I would sometimes hear people praise the department and say what a good reputation it has, but I used to think it was mere polite flattery and didn't

believe them. After coming here, however, I see that the Eng.Lang.Dept. is, in fact, a pretty high-level place, and that Sophia has an truly international atmosphere. So all of you must be very proud of yourselves and of your Alma Mater. Try to find opportunities to go back and visit the fifth floor of Bldg.10; see all the "old faces" and meet some of the new teachers that have entered the dept. since you graduated., and try to get to some of the parties or meetings arranged by SELDAA. As you get a little older, it is good sometimes to go back to your roots.

If you have occasion to come Kyoto be sure to phone or to drop by for a visit. (Phone: office--643-6781 Home--643-0901 Train station; Keihan-sen, Fujinomori-eki). Continue the wonderful work you are doing in both public and private life. Remember, "to live is to love", so check up on yourself every new and then to see if you are really living or not.  
God Bless You All.

William Everett / Koyama Nobuo, S. J.

## 英語学科の現状

英語学科長 楠瀬 淳三

英語学科卒業の皆様お元気でご活躍のことと存じます。英語学科の現状についてお知らせ致します。英語学科は現在一学年につき1600名の定員で、学年による差はありますが、ほぼ、800人の学生が学科で学んでおります。

外国語学部では主専攻の各専攻語学 (major) に加えて、いわゆる副専攻 (minor) を希望により勉強することができるシステムになっております。それぞれ「国際関係副専攻」「言語学副専攻」及び「人文副専攻」が設けられております。そして所定の単位を履習した者には副専攻の diploma も与えられるしくみになっております。

わたくしたちは、アカデミックな研究と同時に多様化する社会的ニーズに応えるという観点から、たえずカリキュラムの見直しを行なってきました。その結果、時代の寵児コンピュータ (operation + programming) を学び実際の即戦力も身につけております。また来年(1988年)からは専門演習科目として、いわゆる「ゼミ」も導入して、より充実した英語学科を旨ざしてまいります。

上智大学海外留学制度に基づいてアメリカ・欧州・NZをはじめ、主として英語圏へ留学する英語学科生の数は、増加の一途をたどり学内随一であります。今後とも留学希望者は増えることが予想されます。

ここで毎年の就職状況を概観しますと、英語学科の卒業生は従来の卒業生と同じようにあらゆる方面に進出しております。製造、非製造はもとより、公官庁、教職(公私立)などで活躍しております。英語学科の今年3月までの卒業生は3,997名ですので大家族になったものです。

来年は英語学科設立30年ということで1つの節目を迎えることとなります。私たち教員一同更なる英語学科の充実と発展を願って今日も一步一步進んでまいります。

Festina lente.

## 野口基金運営委員会報告

### [第2回野口記念懸賞論文の結果報告]

第2回野口記念懸賞論文につきましては、昭和61年10月18日に提出を締切りましたところ、9点の論文提出がございました。この9点につき、選考委員長である楠瀬英語学科長を中心とする英語学科教員の方々により審査いただいた結果、下記2分野2点が各分野再優秀論文として選考されました。

言語学分野	川嶋 正士	Remarks on Double Prenominal Modifiers in Japanese
人文科学分野	東郷 公徳	Walden as a Fiction

なお国際関係論分野については、受賞に値する論文はありませんでした。

上記2名への賞金授与式は昭和61年11月29日に開催されたSELDAAパーティーの席上行われました。

### [第3回野口記念懸賞論文募集]

野口基金運営の3年目にあたります昭和62年度の活動につき、いかなる形で行うかを当委員会で検討いたしましたが、本年度ももう一度懸賞論文を募集することになりました。

今年度の応募方法は基本的には前年度と同様、言語学、人文科学、国際関係論各分野より1点ずつ再優秀作品を選考することにしてありますが、これに加え、1、2年生の参加を促進するために、1、2年生のみを対象としたテーマ自由の第4分野を設けました。

第3回論文選考結果は、次の会報でご報告いたします。

## 寄稿

吉田研作(47年卒)

昨年、上智大学と英語学科のご好意により一年間研究休暇をいただき Washington D.C. にある Georgetown 大学に客員研究員として行かせていただきました。4度目の渡米でしたが、今回は家族を伴っての初めてのアメリカ滞在となり、今までになかった経験を幾つすることができました。以下のエッセイは、ASTE(上智大学英語教員研究会) Newsletter 14号(11月15日1986年)に掲載されたものです。

### COMMUNICATIVE STRATEGIESの勧め

英語教育に携わる者にとって、アメリカやイギリスなど、英語が実際に話されている国に行くことは一つの夢であり、また、ある意味では「義務」だとも言えよう。英語の教師は単なる「語学屋」であってはならない。以前は確かに文法を知っており、思考(思想)的内容の濃い文献を解説できる能力があればそれで良かったかも知れない。そして、そのために必要な知識は、何もアメリカやイギリスに行かなくても、良い図書館さえあれば何処でも身につけることができたかもしれない。しかし、現代の外国語教授法は、いわゆるコミュニケーションな考え方に基づいており、単なる文献よりも、より会話的な側面が強調されてきている。そして、このような傾向の中で生徒に対して、実際に英語が話されている国、国民、文化、社会の中で使われている生きた英語を体験することが大切なのである。

さて、私にとって今回の渡米は4回目である。しかも、通算すると11年目にあたる。しかし、今回もまたもや痛感させられたことは、学校で学んだ英語がアメリカという国の現状を知らないといかに使い難いか、ということである。挨拶表現一つ取ってみても日本と違う。買い物をしてレジにいくと、“How are you today?”といきなり言われて最初は戸惑う人もいよう。日本なら、「いらっしゃいませ」とは言っても、「今日は」とか「お元気ですか」なんて挨拶してくれることはまずないからである。しかし、考えてみると、“How are you today?”と、より個人的な挨拶をされた方が和らいた気分になるとは事実だ。

さて、レジが終わると、今度は「毎度有り難うございました。またどうぞ」という言葉が日本なら返って来る所だろうが、アメリカでは“Have a nice day”である。これも気持ちの良い挨拶ではないだろうか。こうやって見ていくと、日本語というのは、一つ一つの社会的状況に応じて挨拶の仕方が変わるのに対して、英語では、日常会話の表現が比較的そのまま他の社会的状況でも使われると言えらる。ただし、これがいつも良い印象を与えると言う訳ではない。たとえば、同じ買い物をした後、やはりレジでよく言われるのが、“Will that be all?”である。この言い方自体には問題ないのだが、時によっては、ぶすっとした顔で、“Is that all?”と聞かれることがある。25セントで新聞一つしか買わなかった時にこういう言い方をされると何かもっと買ってあげないと悪いような気がしてしまう。こんな時は日本のように、「ありがとうございました」と簡単に言われた方が気分が良い。

次に、ファスト・フードの店に行くともた日本では習わないような表現が沢山でてくる。その中で一番大切なのは、“For here or to go?”かも知れない。つまり、その場で食べるかそれとも持ち帰りか、と言うことである。ところで、ファスト・フード店でも一つ聞かれることがある。“Do you want everything on it?”これは、ハンバーグ、サブマリン・サンドなどに、ピクルス類やケチャップ、マヨネーズ、オリーブなど、あらゆる「付属物」を付けるかどうか、という意味だが、問題は元々何が付くのか知らないのに答えなければならないことだろう。人によっては親切に一つ一つ入れる前に“Pickles? Mustars?”、というふうに確かめてくれる場合もあるが、一般には調理人と注文を受ける人が違うのでそうもいかない。こんな時は、例えば、“What goes with it?”と聞き返すことが必要だろう(もっとも、私のような食いしんぼうは“Everything”で良いのだが)。

さて、買い物をする時にも一つ最初戸惑うことがある。それは、“Cash or credit?”と聞かれることだ。アメリカという国は、とにかくクレジットカード・カードの国なので、チェック一つ切るにも、major credit cardと身分証明書として、運転免許証が必要である。勿論、単なる旅行ならパスポートで良いが、アメリカである程度の期間暮らす積もりなら、やはり、両方とも必需品である。

ところで、アメリカという国は州海に法律が決められているので、交通法規にも多少の違いが見られる。そして、そのため、住む州が変わる度に免許証を書き替えなければならない。ところで、我々のような外国人は国際免許で運転することができ、自動車を買うとなると、やはりアメリカの運転免許証を取得しなければならない。しかも、運転試験を全てやり直さなければならない(国際免許は書き替えてくれない)。視力検査からペーパー・テスト、実地試験まで。もっとも、日本のように大変ではなく、国際免許を持っていて、ペーパー・テストの英語が読めれば(以前いた Ann Arbor 市のように日本語、スペイン語などでテストが受けられるところもあるが)、その日の内に取れてしまうのが普通。こう考えると、日本の英語の授業(特に大人用)の中に、英語のドライバーズ・テストの英語を入れても良いのではないかと思うのだが、どうだろう。

さて、次に紹介するのは、電話を入れる時などに必ず直面する options、つまり、様々な選択についてである。ここでは、電話を入れる時の手順を紹介するが、銀行口座を開く場合なども同じようにいくつかの選択をしなければならない。

アメリカでは、数年前から電話会社が地域毎の小さな会社に分かれ、市内(近距離)電話をかける場合と長距離電話をかける場合で、別々の電話会社と契約しなければならない。そこで、まず、自分が住んでいる地域の電話会社の電話番号を番号案内で調べる。その時に聞かれることは、“What is the first letter of your last name?”つまり、名前が A-K で始まる場合は一つの番号にかけ、L-Z の番号は別の番号にかけるのである。さて、自分がかける番号が分かり、その番号にかけた時からいくつかの「選択」を迫られることになり、その時

の英語が分からないと、とんでもないことになりかねないのである。その第一は、“How would you like your name to appear in the phone book?”である。その次が大切で、日本と違い、電話の契約は unlimited (市内通話を月に何度かけても良い)、limited (市内通話を月50回までかけられるが、それを越すと一回に付き何セントかを更に払わされる)、そして、basic (かける回数に関係なく、一回毎に何セントか払わされる)の三つの内から一つを選ばなければならない。それ以外にも、forwarding service (転送サービス)を付けることもできる。その後更に選択を迫られるのが、“Will you be using a touch-tone (プッシュホン) or a rotary (ダイヤル)?”である。そして、更に、“Which long-distance carrier (長距離電話会社) will you be using?”と聞かれる。ところで長距離電話を扱っている会社の中で国際電話を扱っている会社は二・三しかないので注意が必要である。とにかく、電話一本入れるだけでもこれだけの選択を迫られる訳で、銀行口座を聞こうものならもっとわけが分からなくなってしまう。

以上のように、我々が日本の学校で学ぶ英語は、確かに最も一般的な対応の仕方を例示してくれたものかもしれないが、実際にアメリカで暮らすとなると、教科書に出てこない表現が日常生活において大きなウェートを占めていることを考えなければならない。だからと言って、上記で述べたような表現を教える必要があると言っているのではない。なぜなら、同じアメリカでも、地方によって多少違った習慣があるだろうし、イギリスやオーストラリアなど、アメリカ以外の英語圏ではそれこそ全く違った習慣があるだろうからである。ただ、一つ言えることは、基本的な慣用表現などを教えると同時に、次のような communicative strategy に関わる表現も教える必要がある、と言うことである。Excuse me, I don't understand. Could you repeat that, please? Is that (this) all? Can you explain that to me? What do you mean by ~? What should (must) I do next? などがそうである。つまり、決まりきった慣用表現は必要だが、個々の実際の状況にうまく対処するためには、このような「問題解決」に役立つ表現をもっと取り入れ、頻繁に練習する必要があるのではないだろうか。

言語教育がどこまでのことを含むかは難しい問題だが、少なくとも言えることは、実際に外国で暮らすとなると、言葉以外に様々な面で問題が生じ、そのような時に必要な表現は、学校では直接教え切れるものではないということである。だからこそ、問題が生じた時に、その解決のために役立つ表現が大切になってくるのである。言語生活とは単に決まりきった言語が話せるだけで営めるものではない。その言葉が話されている実際の社会の慣習などに基づいた言葉の使われ方というものが、それを知ることが大切なのである。そして、その言葉の使われ方を知る手段としての communicative expressions が必要なのである。また、その意味でも、英語の教師が実際に英語が話されている社会の中で一度は生活し、その体験を基に、より良い communicative strategy を身に付け、それを生徒に教えられるようにして欲しいと思うのである。

(英語学科助教授)

## 四谷界限

四谷で、来年75周年を迎える上智大学と同年のものといったらお分かりになるだろうか。新宿通りの四谷見附橋である。1913年(大正2年)、当時の建設省がヨーロッパの技術を導入して建造した鋼方杖ラーメン橋で、建造にあたっては、旧江戸城外堀の土塁を橋のたもとと四隅に活かすよう工夫がなされた。時と共に鈍色に沈んだこの橋は、現在に至るまで迎賓館(旧赤坂離宮)、イグナチオ教会、キャンパスの赤レンガが校舎等と相まって四谷の西歐的で懐古的なえいわれぬ雰囲気醸し出している。

晩秋の日ざしの中、ぬけるような青空のもと、土手も、若葉公園のいちょうも黄金色に輝き、そのむこうに迎賓館の灰緑色の屋根が照り返すのを臨みながら、赤く色づいたつたのからまる橋を足早に渡って授業に向かい、夕暮ともなると、にぎやかな新宿通りのネオンを背景に仄明るくガス燈(勿論現在では電気)が灯り、7・8時限、あるいは9・10時限を終えて快い疲労をおぼえながら家路を、はたまたしんみち通りへと急いだ思い出をもたれる方も多いのではないか。

この度、建設省の都市計画道路放射線5号線(新宿通り)整備事業の一貫として、老朽下した橋の架けかえ工事が行われることとなった。完成予定は1991年(昭和66年)3月で、橋長44.4m、幅員40.0mと、現在のものよりかなり大きくなるため、担当者によると、これを機に、戦前の基準で造られた各部分の強度、耐久性等について理化学実験を行った上、現在の基準に合うものは使用し、合わないものや長さ等足りないものは複製を作製して、なるべく元の形をとどめる方向で架けかえるという。文化庁、環境庁等関係各省庁からの要請も強いらしい。

いずれにせよ、長い上智の歩みと共にあり、その様変わりを、のみならず四谷の移り変わりを見つめてきた四谷見附橋の改修に、時の流れを感じる今日この頃である。

## 第1回定例総会報告

去る昭和61年11月29日(土)に上智大学英語学科同窓会第1回定例総会が開催され、下記の議題が討議、承認されましたので、ご報告いたします。

### 1. 総会議長の選任

小林康司氏(昭和34年卒、現幹事会議長)が推薦され、満場一致で選任された。

### 2. 会務報告

鈴木達也会長(昭和38年)および鈴木博文副会長(昭和49年卒)より昭和59年度、60年度、61年度の3年間にわたる同窓会の活動についての会務報告があった。

### 3. 次期会長の選任

下記の者が英語学科同窓会次期会長(任期：昭和62年1月1日から昭和64年12月31日まで)に推薦され、満場一致で選任された。(敬称略)

鈴木達也(昭和38年卒)

以上

## 幹事会報告

会報第6号での幹事会報告の後、現在までに3回の幹事会が開催され、下記の議題が討議、承認されましたので、ご報告いたします。

#### ◆昭和61年度第1回臨時幹事会

昭和62年2月7日開催

##### 1. 副会長および常任委員の指名とその承認の件

去る昭和61年11月29日に開催された第1回定例総会で選任された鈴木達也会長から下記の3名が副会長に、また6名が常任委員にそれぞれ指名され、幹事会において承認された。

副会長	鈴木禮子 (41年卒)	吉田研作 (47年卒)
	鈴木博文 (49年卒)	一事務局長兼務一
常任委員	橋場裕子 (49年卒)	込山雅弘 (50年卒) 一会計委員一
	込山博子 (52年卒)	斎藤資晴 (57年卒)
	漆原朗子 (59年卒)	武富直人 (61年卒)

#### ◆昭和62年度第1回定例幹事会

昭和62年4月18日開催

##### 1. 昭和61年度決算の承認の件

常任委員会込山雅弘会計委員より昭和61年度決算書の説明があり、続いて陶山仁会計監査員(昭和61年卒)より決算書に対する会計監査報告を受けて、原案通り承認された。(詳しくは別表をご覧ください。)

##### 2. 昭和62年度年間計画および予算の承認の件

鈴木達也会長および鈴木博文副会長より昭和62年度年間計画についての説明があり、続いて込山雅弘会計委員より同年度予算の説明があり、原案通り承認された。(詳しくは別表をご覧ください。)

##### 3. 名誉会員の推薦と承認の件

下記の2名の方が、会則第5条第2項により本会名誉会員に推薦され、承認された。(敬称略)

上智大学学長 土田将雄  
学校法人上智学院理事長 クラウス・ルーメル

#### ◆昭和62年度第1回臨時幹事会

昭和62年7月11日開催

##### 1. 野口基金運営委員会報告

込山常任委員より第3回野口記念懸賞論文募集について説明があった。(詳しくはこの会報の記事をご覧ください。)

##### 2. 細則第6号「幹事代行の設置に関する暫定規定」の件

鈴木博文事務局長より、細則第6号を設けて、会則に定められている各年次2名の幹事の他に各クラス1名の幹事代行を置くことができるようにしたい旨の説明があり、一部修正の後議決された。(関連事項として、この会報の「幹事の改選について」をご参照ください。)

以上

科	目	昭和61年度 予算	昭和61年度 決算	昭和62年度 予算
取	1. 前期よりの繰越	705,409	705,409	1,219,864
	2. 入会金	80,000	148,000	100,000
	3. 会費	1,400,000	1,576,000	1,200,000
	4. 受取利息	40,000	36,425	30,000
入	合計	2,225,409	2,465,834	2,549,864
支	1. 名簿作成積立金	350,000	350,000	650,000
	2. 会報	250,000	176,500	250,000
	3. 郵送料	490,000	346,860	259,000
	4. パーティ補助金	100,000	83,760	100,000
	5. 講演会	50,000	50,000	50,000
	6. 女性セミナー	50,000	40,000	50,000
	7. 常任委員会運営費	50,000	32,400	50,000
	8. 事務局運営費	500,000	103,880	150,000
	9. 幹事会運営費	50,000	21,400	50,000
	10. 子備費	335,409	41,170	940,864
	合計	2,225,409	1,245,970	2,549,864
	差引収支		1,219,864	

# 英語学科創立30周年記念行事に向けて

英語学科同窓会会長 鈴木 達也

私は去る昭和61年11月29日に開催された英語学科同窓会第1回定例総会において、前期に引き続き会長に選任され、本年1月1日就任いたしました。昭和64年末までの3年間の任期中、会員の皆さんとともに同窓会の活動を盛り上げていきたいと考えておりますが、来年、昭和63年は上智大学英語学科の創立30周年の年にあたります。また同年は上智大学創立75周年にもあたるため、同窓会といたしましてもこの事柄を私の会長任期中の最大のイベントとしてとらえ、英語学科教職員の方々、学生諸君と協力して、盛大な記念行事を計画しております。

詳しくは常任委員会、幹事会において討議し、会報もしくはソフィアだよりなどを通してご報告申し上げますが、この記念行事を成功させるために会員の皆さんの精神的、物質的なご協力を切にお願いする次第であります。

## 幹事の改選について

この英語学科同窓会は各年次2名づつ選任された幹事によって構成される幹事会の席上で、予算、決算をはじめとする案件を審議しておりますが、同窓会会則第10条2項によれば、幹事の任期は4月1日から翌々年3月31日までの2年間となっております。来々年(昭和63年)3月がちょうど幹事の改選期となります。

本会の会員は日本全国、あるいは世界各地に在住されているため、統一選挙のような方法での改選はきわめて困難であろうと思われまふ。従って、常任委員会および事務局では次のような方法によって幹事の改選を行う事としました。まなこの方法は前回の改選時に行った方法と同じものです。

1. 各年次の幹事に立候補される方は、昭和63年1月末日までに下記の同窓会事務局宛に文書でお知らせください。
2. 立候補者のいない年次の幹事の選任は現幹事に一任することとし、事務局からその旨を現幹事に通知いたします。
3. 立候補者多数の年次の幹事の選任は、現幹事が選挙管理人となって、往復葉書などによる投票を行ってください。その際の費用は本会予算(予算費)でまかないます。
4. 幹事の選任に関する年次は入学年度を基準としてください。(同窓会細則第3号「幹事の選出に関する年度規定」による。)
5. 同窓会細則第6号「幹事代行の設置に関する暫定規定」の制定により、今回から会則にきだめられている2名の幹事の他、各クラス1名の幹事代行を置くことができることになっています。合せて選任してください。(なお選任方法は各年次の幹事に一任されています。)

以上のような方法によって選任された幹事および幹事代行は氏名、連絡先を必ず事務局までお知らせください。それによって幹事会の招集文書などをお送りいたします。

以上

上智大学英語学科同窓会事務局 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学英語学科事務局 気付

参考：各年次の現幹事名簿 任期：昭和61年4月1日～昭和63年3月31日

32年	森 哲夫、草野 正策	33年	山本 哲生、渡辺 宏	34年	井篁 重慶、小林 康司
35年	草薙 裕、神谷 尚桂	36年	筒井 義人、中村 輝久	37年	長谷川幹夫、斎藤 高德
38年	石山 輝夫、長谷川真弓	39年	水口 泰弘、関口 祥子	40年	石川 雅弥、原岡 浩子
41年	今村 博展、鐘ヶ江弓子	42年	小島 二宏、丸山 正子	43年	鈴木 正秀、山田 顕子
44年	吉田 正明、深田 博子	45年	遠藤 雄司、菊池 良江	46年	田岡 信雄、高垣 千恵
47年	植村 和志、九鬼 悦子	48年	笠島 準一、河野 ナナ	49年	市川 正明、小杉 洋子
50年	川俣 善雄、時 悦子	51年	石川 真弓、小野 亮輔	52年	柳瀬 和明、片野 順子
53年	西野 哲、小西 明子	54年	鷗浦 裕、岡田 敦子	55年	内村 直友、欠 員
56年	金子 茂雄、清水さゆり	57年	向 美穂、宮坂 聖一	58年	松本 曜、黒田 博子
59年	中村 寛、徳森 洋子	60年	陶山 仁、道明 磨美	61年	安藤 光顕、田原 晴子
62年	三浦勢津子、未 定				

## 名簿管理担当常任委員からのお知らせとお願い

英語学科同窓会では、昭和58年に「上智大学英語学科同窓会名簿」第一版を発行以来、会の活動の重要なもののひとつとして英語学科同窓会の名簿管理を行ってきました。しかし会員数3,500名という大所帯に加え、専従の事務局員を置くことが予算的に困難なことから、会員の皆様には何かとご迷惑をおかけしております。来たる昭和63年秋に予定しております第二版の発行に向けて、コンピュータを導入して事務の簡素化を計るなどの努力を重ねておりますが、会員の皆様に次の事柄についてのご協力をいただきたく、ここにお願い申し上げます。

1. この会報に同封しておりますSELDAAPARTYへの返信用葉書に住所、勤務先などの最新のデータをご記入のうえ、投函してください。
1. お知合いの英語学科卒業生でこの会報が届いていない方がいらっしゃいましたら、必ずご本人から英語学科同窓会事務局まで官製葉書でお知らせくださるようにお伝えください。その際「氏名(フリガナ)」、「卒業年度」、「自宅住所」、「自宅電話番号」、「勤務先」、「勤務先電話番号」の6点を必ずご記入くださるようにお伝えください。

以上  
名簿管理担当常任委員 武富直人

## 常任委員会から会費納入のお願い

英語学科同窓会の運営は会員の皆さんの納入される会費によってまかなわれていることはご存じのことと思います。本同窓会は設立されてから4年目を迎えておりますが、設立時に多くの会員の皆さんに3年分の会費を納入していただき、これをもとになんとか会の運営は成立ってまいりました。しかしながら4年目の本年度につきましては、予算では600人分の会費を計上しているにもかかわらず、これまでに351人の方々からしか会費の納入をいただいております。

つきましては本年度分以降の会費を未納の方は早急に納入の手続きをお願い申し上げる次第です。なおできれば今後3年間の会費を納入していただければ幸いです。また、これまでに一度も会費を納めていらっしゃらない方は、会費とは別に入会金も一緒に納入してください。

[会費納入方法]

- ◆年会費2,000円、入会金1,000円です。従って3年分をお納めの方は6,000円、また今まで会費未納の方は入会金1,000円を加え、7,000円を納入願います。
- ◆会費は11月28日のSELDAAPARTYの受付でお支払いいただいても結構ですが、同封の払込用紙をご利用されるのが便利です。なおお振込みの場合、必ず卒業年度と旧姓(ここ一年間に姓が変わられた方)をご記入ください。
- ◆なお今まで納入済の会費についてご質問がある方は、下記の常任委員会会計委員までお問合わせください。

以上

会計委員 込山雅弘 03-706-3008(自宅)